

極めて高いと思う。

なお近年では中世建築史の分野で主殿系建築の成立について関心が高まっている。その研究対象の一つとして興福寺大乗院の指図群が活用されており、今回提示した寢殿と公文所という儀礼の場の問題も、このような近年の研究動向と関連させながら捉えていく必要があるだろう。特に今回は概観を略述するに終わってしまった院家における寢殿・公文所の意義については、広範な諸史料を活用して建築内部の構造の詳細を説明していく必要があるだろう。無論、建築構造の問題はそこで行われた儀礼の分析と関わらせて行っていくべきで、興福寺の年中行事書の読解も継続して行っていく必要があるだろう。

〈東洋史部会〉

『帰蔵』成立の要因について

川村 潮

『帰蔵』は一般に殷代における易のこととされるが、これまで知られている薛貞注を附すテキストは、長らく魏晉期の偽作と考えられてきた。ところが、湖北省荊州市の王家台一五号秦墓から出土した「易占」と仮称された竹簡群が、この薛貞注『帰蔵』佚文とほぼ合致することが明らかとなった。このことにより、『帰蔵』「易占」はあらためて殷代の易の一端を明らかにするものとして注目される

平成一八年度早稲田大学史学会大会報告

ようになったのである。

とはいえ、『帰蔵』「易占」を殷易そのものとは見ることは難しい。「易占」の発見によって明らかになったのは、魏晉の偽書ではない、ということにすぎないからである。もともと『帰蔵』は殷易ではなく、それが殷易とされるようになったのは、主として『周礼』の解釈と、『帰蔵』が『周易』と類似する卦名・卦辞をもつことに由来すると考えられる。だが、『帰蔵』を殷易とする理解が直接的にはこの二点に起因するとはいえず、その背景には、それをとりまく歴史的状况、とくに経学的言説の展開があったと想定される。

そこで、『帰蔵』が殷易とされた要因を当時の情勢、とくに経学の展開の中に位置づけ、そのうえで戦国時代における「術数」がいかにして後世に伝承されたかを検討する必要がある。

その要因を考えるうえで注目されるのが、後漢・桓譚『新論』正経篇の記述である。ここでは『帰蔵』はいわゆる「古文」の一つとされており、また「易占」の発見で明らかになったように、『帰蔵』は戦国後期にまで遡るものである。「易占」の書体は楚系文字の遺風を残しており、「元(其)」字など六国系とされる字体も見られる。その内容は伝説・神話的事例を多く含み、晋代では『帰蔵』は『山海経』『司馬法』などととともに「太古の書」とされている。これらのことからすると、当時の人びとは『帰蔵』を古文とみなしていたと考えられる。

『易経』の古文としては、従来「費氏易」の学派が用いていたテ

キストがそれに当たるとされてきた。費氏易を古文易とすることに否定的な見解もあるが、いずれにせよ、かつて「古文易」なるものが存在していたとは考えにくく、仮にそれがあったとしても、『尚書』・『春秋』のように、今文に対して大きな議論となるだけの差異をもっていなかったと考えられる。

そこで杜子春をはじめ王充・桓譚・鄭玄など『帰蔵』に言及するものがいずれも古文学の系統を引く人物であったことに注目される。先学によると、古文学は古文テキストを最も重視するが、古文に限らず広く資料にもとづき、それらによって経書の真義を説明しようとする手法・態度に特色があるとされる。端的にいえば「訓詁の学」ということになるが、『易経』においてその手法を用いたのが費氏易であり、それは通行本(王弼注)の基礎となったものとされる。したがって、費氏易がいわゆる古文経を用いるものでなくとも、当時の経説の中では「訓詁」的な態度、すなわち広く他の資料にもとづき経典を解釈するという手法が重視されていたと考えられる。夏易・殷易・周易の「三易」という理解にもとづく注釈に見られるように、『連山』・『帰蔵』・『周易』の三易をそれぞれ夏・殷・周のものとする、『周礼』春官・大卜条に対する理解は、他の経書と結びつけて考えられている。それは逆にいえば『周礼』を筆頭にこれらの経典が三易の存在を証明しているともいえるのである。

本報告で検討したことをまとめると、以下のようになる。『帰蔵』はその伝承の過程、内容などから、古文の一つと目されていた。一

方、『易経』は今文・古文という区分の存在が疑問視されており、出土文字資料などから見ても、易の今文・古文に経説上大きな差異があったとは考えにくい。これらのことから、『帰蔵』は『周易』以前の易を伝えるもの、すなわち古文として重要性を持ってきたと考えられる。また「殷易」に言及するものが、いずれも古文学に通じた人物であったことも注目される。経説からいえば、いわゆる古文学は古文テキストだけでなく、他の経書をも含めて広く総合的理解を目指すものであった。そこで、他の経書に「三易」の存在を肯定するような記述が見えることは、これがそれぞれ三代(夏・殷・周)の易を説明していると考えられたのであろう。こうして『帰蔵』が諸経典の総合的な理解によって、換言すれば当時の経説の中で正当性を持つにいたったのである。『帰蔵』の成立していく過程は、戦国以前の「術数」に属する技能・典籍が、「儒学」という当時の思想的背景のもと大きく読みかえられたことを示している。すると戦国時代において、後に「儒学」に包摂されていく「術数」がいかなるものであったかが問題となるが、その検討については今後の課題としたい。

北朝における華夷構造 — 稽胡の事例を中心として —

滝川 正博

五胡時代から南北朝時代にかけて、中国華北を支配したのはモン